

パリ日本人学校における日本文化理解の実践 —低学年での作品作りと現地校交流を通して—

前日仏文化学院パリ日本人学校教諭

茨城県つくば市立竹園東中学校教諭 武藤 望

キーワード：文化理解、国際交流、生活科、図画工作

赴任校の概要 (2019年4月15日現在)

学校名・日本語：日仏文化学院パリ日本人学校

学校名・現地表記：INSTITUT CULTUREL FRANCO-JAPONAIS

URL:<http://www.parinichi.com/index.php>

児童生徒数 小学部 172名 中学部 42名

1. はじめに

フランスのパリ郊外にある在外教育施設で教諭として過ごした3年間は、大変貴重なものとなった。パリ日本人学校では、小学部の担任と中学部の美術の指導に当たり、発達段階に応じた指導の違いを感じたり、現地で手に入れられるものを使った教材で試行錯誤しながら教科指導をしたりするなど、その時は無我夢中であったが、振り返ると自分自身の大きな成長につながったと感じている。また、フランスの中で生活し、現地の文化に触れることで、逆に「日本文化」についても強く意識することができた。フランスの文化を知ること大切であるが、グローバル社会においては、自国の文化をよく知ること重要である。ここでは、小学部低学年における日本文化の理解のための実践を紹介していきたい。

2. パリ日本人学校について

パリ日本人学校は、フランスの首都パリではなく、パリから30kmほど離れた郊外の町、モンティニー市にある。パリ日本人学校には小学部と中学部が設置され、小中一体型の校舎で学んでいる。児童生徒の大半はパリに住み、毎日スクールバスで通学している。保護者の仕事の関係で日本からきて、2~4年でまた日本に戻るという児童生徒が多いが、アメリカやドイツといった海外から来て、また別の国へ行くという児童生徒も少なくない。また、中には卒業後もフランスに住み続ける予定の児童生徒もいる。

3. パリ日本人学校低学年における、日本文化理解のための実践

(1) 日本文化理解の必要性

先述したように、パリ日本人学校の児童生徒は数年でまた日本へ戻ることが多い。しかし、特に低学年の児童は物心ついたころから日本を離れている場合も多く、日本の文化への慣れ親しみは深くはない。児童は日本の文房具や本、衣装等に対しては非常に興味・関心をもっており、そのようなものを所持していることが一種のステータスと感じており、プレゼントではそういった日本のものをもらうことに非常に喜びを感じているようであった。しかし、そのような「もの」に対する意識に比べ、行事や芸術作品などといった「文化」への関心はあまり高くないように感じた。海外で生活をしていると、日本文化へ触れる機会が少なくなり、同時に関心が高まりにくいことは仕方のないことであるように感じる。

国際理解というと、様々な国について学ぶことが大切であると同時に、自国の文化への理解も非常に重要になってくる。私自身の経験であるが、何度もフランス人から日本の文化に対しての質問を受けたことがあった。会話の中で感じたことは、しっかりと知識をもち伝えることに加えて、自分はどう思うか、どう関わ

っているか、といった主観的な内容を述べることも大切であるということである。そのような観点から、低学年においても、楽しみながら日本文化に触れ、自分なりに考えをもち、発信していくことは非常に重要であると考える。

(2) 「願い」がこめられた行事をもとにした作品づくり

日本文化の中には「願い」がこめられた日本特有の行事がある。例えば、七夕の際には願い事を書いた短冊を笹に結び付ける、等である。児童が日本の行事の意味や由来を知り、かつ自由に自分の願いや目標などを表現することができることを目標にいくつかの実践を行った。

① 「わくわくおせちづくり」

今では主に正月に食べられることが多くなったお節料理であるが、かつては1年に何回かある節句に食べられていた。そこには、五穀豊穡と子孫繁栄、立身出世などの人々の願いが込められている。今回の実践では自分の「願い」や「新年の目標」を食べ物に込めて絵にかき、重箱の形をした紙に貼っていった。時期は12月の冬休み前に行った。

始めに、日本のお節料理の紹介をした。食材だけでなく、なぜそれがお節料理に入れられるようになったかについても説明した。例えば、エビは「腰が曲がるほど長生きできるように」、伊達巻は巻物の形に似ていることから学問を連想させ「勉強がよくできるようになるように」、黒豆は「マメに働くように」等である。

いくつか紹介した後に、自分だったらどんな食材を入れたいか考え、ワークシートに書いた。それまでに紹介した食材を使ってもよいし、自分で好きな食材を入れてもよいことを伝えた。「願い」や「目標」を込めると同時に、自分や家族が「食べたい」と思える食材を選ぶとよいことをアドバイスした。すると、「ブリって、(成長するにつれて名前が変わることから)偉くなる魚なんだね。魚だったらサーモンも好きだから一緒に入れよう」「絵がうまくなりたいたいから、筆に似た形のアスパラガスを入れようかな」「サクラamboを入れるよ。私と妹と一緒にくっついているみたいでしょ」といった自由な発想が生まれた。また、「背が高くなりたいたいから、フランスパンを入れるよ。クロワッサンは、曲がっているからエビの代わりに入れよう」とフランス在住ならではのアイデアもあった。

ワークシートに書いたアイデアをもとに、画用紙に絵をかいて作品を作っていくと、彩を考えて別の食材を入れる児童もいた。そこで、日本で縁起の良いといわれる、梅、竹、松を紹介すると、食材の間にそれらを描いて切ったものを入れたり、重箱に描いたりした児童もいた。それぞれ、自分の「こうなりたい」という気持ちをお節料理として表すことができた。



「わくわくおせちづくり」の作品

② 「つるしびなづくり」

雛祭りは女の子の健やかな成長を願う行事で、パリ日本人学校でも2月中旬になるとエントランスホールに7段もの雛人形が飾られる。日本であっても7段の雛飾りを目にする機会はそれほど多くなかったため、子どもたちだけでなく、保護者からも好評である。段になった雛人形のほかに、「吊るし雛」というものがある。これは、糸にお雛様とお内裏様だけでなく、様々な縁起物をモチーフとした人形を吊るしたものである。今回の実践では、折り紙で作ったお雛様とお内裏様の他に、画用紙に好きなモチーフを描いて紙テープに貼り、紙コップを使って吊るした。時期は3月上旬に行った。

今回の実践も「わくわくおせちづくり」と似たような展開であるが、今回は自分のための吊るし雛であってもよいし、誰かのための吊るし雛を作ってもよいこととした。また、雛祭りをもともと女の子の成長を願う行事であることを伝えたいので、今回は性別を問わず、「素敵な『願い』を込めよう」と伝えた。

児童が作った作品には、こちらで用意した「さるぼぼ」や「亀」「鶴」「羽子板」などの日本の伝統的なモチーフの他に、「象」「王冠」「鉛筆」「フクロウ」など児童自身が考えた多彩なモチーフが見られた。それぞれ「象のように大きくなりますように」「運動が一番になりたいから、王冠を描いたよ」「勉強ができるようになりますように」「前に読んだ本で、フクロウって『不苦労』で、幸せの鳥だって書いてあったよ。だからフクロウを描いたよ」といった

児童の願いが込められていた。その他にも、「スイカが好きだから」と、スイカを入れている児童もいた。また、吊るし雛を自分のためではなく、家族の誰かのために作っている児童も多く、「帰ったらお母さんにあげるんだ」などと嬉しそうに話していた。



「つるしびなづくり」の作品

(3) 現地校交流での取り組み

①パリ日本人学校における現地校交流

パリ日本人学校の小学部では、それぞれの学年で年2回、現地校との交流を行っている。交流する現地校の子ども達は、該当学年と同じか近い年齢の児童である。交流する学校はパリ日本人学校の近くにある小学校である。フランスの小学校は土日に加えて水曜日にも休みであるが、両親共働きが多いフランスでは、保護者の仕事の都合などで、日本でいう「放課後子ども教室」のように小学校の施設を使って開かれている教室に預けられている児童も多い。現地校交流は、主に水曜日に設定され、そのような児童と交流を行っている。2回の交流のうち、1回は現地校を訪問し、もう1回はパリ日本人学校で受け入れて交流をする。どこの小学校と、いつ交流をするかは、市役所のほうでコーディネートをしてくれ、長年パリ日本人学校が地元のモンティニー市と交流を続けてきた実績が感じられた。

②小学部1年生における受け入れ現地校交流

受け入れの際は、各学年工夫を凝らした活動を計画する。私が2年目に行った1年生の交流では、パリ日本人学校の児童が日本の遊びの良さや楽しさを知り、それを現地校の児童に分かりやすく伝えるという目標を設定した。そこで子どもたちがいくつかのグループに分かれ、日本の遊びを現地校の児童に体験してもらうという計画を立てた。

子どもたちからは、けん玉やかると、折り紙やコマ回しなどの遊びを紹介して一緒に遊びたいという案が出た。とはいえ、けん玉やコマ回しといった遊びを体験したことのある児童とそうでない児童がいたり、日本語のかるたでは現地校の児童が分からなかったりするのではないかと、という意見もすぐにあがった。そこで、まずは自分たちでしっかりとそれぞれの遊びを体験し、面白さを見つけようということになった。けん玉やコマ回しは、上級生に得意な児童がいたため、技を披露してもらったり、やり方を教えてもらったりした。しっかりと遊びを体験することで、その面白さだけでなく、どんなところに難しさがあるのかということも分かった。

パリ日本人学校の小学部1年生のカリキュラムの中にはフランス語が組み込まれている。児童は「現地校の児童に紹介する際には、日ごろ学んでいるフランス語で紹介したい」という気持ちをもっていた。まだま

だ使える単語や文も少なかったが、フランス語の担当講師に支援してもらいながら、説明を紙に書いたり、説明を読む練習をしたり、「見てください」「やってみましょう」といった簡単な指示を行えるようにした。かるたでは、日本語の代わりにアルファベットとフランス語単語を用いながら作成した。

交流当日は、中々意図したことが伝わらない、といった困難な場面もあったが、そのたびに忍耐強く説明しようとする児童の姿が見られた。きちんと説明が伝わると、スムーズに活動が行え、パリ日本人学校の児童と現地校の児童とが一緒になって楽しく遊ぶことができた。また、活動の中で作った折り紙は大変喜ばれた。

(4) 成果と課題

日本文化を取り入れた活動を通して、その行事や遊びの知識だけでなく、自分なりに考えたり協働的に活動したりすることができた。日本への理解を深めると同時に、「自分がどうしたいのか、何をすればよいのか」といった、主体的な学びにつながったと感じている。また、異学年交流や教科の横断的な学習を行うことができ、更に様々な実践に応用できるのではないかと考える。今回は紹介できなかったが、中学部2年の美術の授業の中で、紙粘土による和菓子作りを行い、作品展を開催して小中で作品を見合った。和菓子にはなじみのない児童生徒も多かったが、作品制作や作品展を通して日本文化の共有を図ることができた。

課題として、「わくわくおせちづくり」や「つるしびな」では発表の場の工夫があげられる。作品を作って学級内での発表は行ったが、それを他の学年や家庭に広げるところまでには至らなかった。「文化を伝える」という観点からすると、現地校交流において現地校の児童に遊びを紹介した時のように、他の学年に向けて発表したり、家庭でどんなものを作ったか保護者に説明してコメントをもらったりなど、「進んで伝える」ための工夫をするとさらに有意義な実践となったと感じている。

4. おわりに

パリ日本人学校においては、在外教育施設ならではの多くの教育実践に取り組むことができた。それは、パリ日本人学校の教職員が1つのチームとなって教育活動を行ってきたからに他ならない。本当にたくさんの場面で支え、助けていただきながら過ごした3年間であったと感じている。子どもたちの成長を願いながら、振り返れば一番成長させてもらったのは私自身であったと思う。この場を借りて、パリ日本人学校の教職員の方々、また現地での教育活動をサポートしてくださった方々に感謝申し上げたい。